身近な課題に取り組み生きる力を育む

地域で育むキャリア教育

沖縄のシンボル、首里城で県外からの修学旅行生にガイド活動を行ってきた興南アクト部。2019年の火災による首里城正殿焼失、そして新型コロナウイルスによる修学旅行の中止と相次ぐ試練を乗り越えてきた部員たちに話を聞きました。

県外中高生と交流する“外向き文化系”興南アクト部

第26回 興南中学校・高校（沖縄・私立）

取材・文／江森真矢子

「県外出身の私が感じることは、人と人とのつながりが、ここ沖縄には強く存在するということです。子どもたちが社会とつながる機会に恵まれた沖縄には、次世代の沖縄、そして次世代の日本や世界のリーダーが育つ豊かな土壌が既にあるのです」

大阪出身の門林良和先生は、教室と世の中をつなぎたいという思いを抱いて教員になり、2008年、興南中学・高校に着任した。冒頭の一節は、『15歳へのバトン』（ボーダーインク／2013年）に門林先生が寄せた文章。同書は有志生徒と共に結成したクラブ「社会科部」で、県内外の著名人に取材した内容をまとめたものだ。

「一人の力で世界を変えられると思いますか？」「勉強って将来役立ちますか？」「創っていきたい理想の沖縄像を教えてください」「15歳のうちなーんちゅへのメッセージを」。2年間で42人へのインタビューを続けるなかで、成長した生徒たちの活動はやがてラジオ出演やビジネスコンテストへの挑戦へと活動の幅を広げていった。

ガイドを通して生まれたのは自信と沖縄への誇り

創部当初4人だった部員は、80人を超えるまでになり、名称も「興南アクト部」に。現在の活動の柱は、県外からの修学旅行生への首里城ガイドだ。

取材時、部長を務めていたのは高校3年生の仲村篤紀さん、副部長は大蔵香澄さん。共に中学1年で入部し、生徒会や他の部活動とも兼部しながら6年間活動してきた。仲村さんは門林先生の社会科の授業が刺激的で「この人についていったら面白いことがありそう！」と入部を決意、中学1年生でガイドデビューをした。

ガイド（左ページ写真上）は、中学生から高校生まで2～4人程度のグループで行い、先輩から実地で方法を学んでいく。「最初はガイドブックを読みながら伝えるのが精一杯でしたが、だんだんに自分なりのガイドができるようになりました」と大蔵さん。

県外の中高生に首里城の見所や歴史、沖縄の文化を伝え「すごい！」と感心され、「面白い！」と興味をもってもらった経験を通して生まれたのは、沖縄への誇りや愛着の自覚。また、初対面の人にも積極的に話しかけ、会話が生まれるように工夫を重ね、表現力やコミュニケーションの力も育まれた。「首里城がなければ今の自分はいない」「自分を成長させてくれた場所」と二人は口を揃える。

首里城焼失を乗り越えて新たなアイデアでガイド

その首里城で火災が発生した。部の中心となって活動していた高校2年生の秋、10月31日のことだった。「早朝から携帯が鳴って、え？って」実感のないまま登校し、校舎から首里城方面を見ると煙が上がっていた。

2日後にはガイドをすることになっていた。正殿はやっと鎮火したところだ、中止するしかないか…と中心メンバーで話し合って出した結論は「私たちにとっては悲しいことが起こってしまったけれど、せっかく沖縄に来る子たちには楽しい思い出をつくってもらいたい。笑顔で迎えよう」。ガイドは、やる。ただし、自分たちで作成したスライドを映したスクリーンの前で。

校内でのバーチャルガイドをやり遂

（左から）門林良和先生（「よのなか」科担当・アクト部顧問）、大蔵香澄さん（高3・アクト部副部長）、仲村篤紀さん（高3・アクト部部長）

School Data

1962年創立／普通科／生徒数：中学452人（男子223人・女子229人）、高校1045人（男子651人・女子394人）／進路状況（2020年3月卒業生）大学314人・短大5人・専修38人・就職5人

げ、修学旅行生を見送った後、部員たちは首里城に向かった。「本当に燃えてしまったんだな…って。いろんな衝撃を受けました。でも、これから新しいものを私たちが作っていかなければいけない、という思いも強くしました」大蔵さんはそう振り返る。

その後も数校を学校に迎え入れてガイドを続けたが、次第に、部員たちは「何か違う」と感じるようになった。臨場感がない、一緒に歩きながらのお喋りがない。そんな状況を打開したのは、バーチャルリアリティ（VR）によるガイドという新しい方法だった。協力してくれたのは東京工業大学の川上 玲特任准教授。世界中に呼びかけて集めた写真を使い、3D画像を合成する「みんなの首里城デジタル復元プロジェクト」の中心人物だ。画像はスマートフォンをセットしたゴーグルを通して見ることができる。これを持って、首里城正殿前で再びガイドができるようになったのだ。

「私たちが大切にしていたのは知識を伝えることじゃなくて、交流することだったんです。ガイドをしながら毎回、連絡先を交換して、県外や国外に友達ができました。火災の後もインスタやLINEでたくさんのメッセージをもらいました。火災で状況が変わって、挑戦してきたことをみんなで振り返った時に気づいたことです」（大蔵さん）

外に出て行動して新しい自分に出会って

VRを使った新しいガイドも、昨年来のコロナ禍で修学旅行の中止が相次ぎ、今は出番がない。しかし、想定外に対応する力をつけた生徒たちは、こんな時だからこそ県外だけでなく県内にも首里城の魅力を伝えたい、とSNSによる情報発信を始めている。

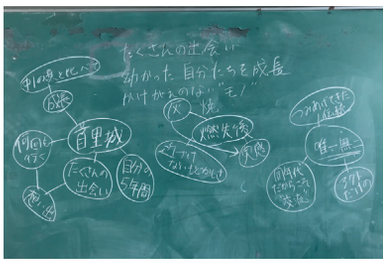
「修学旅行生だけでなく、沖縄の人たちにも思いを伝えることができるようになった」「高校生の私たちでもここまでできた。後輩たちにも、やりたい！と思ったことにはチャレンジして、と伝えたい」と二人は言う。これまで、興南アクト部は30校、４０００人を超える中高生と交流をしてきた。部室の壁にはお礼のメッセージ、ガイドに代わり基地や平和について議論した際の模造紙などが所狭しと貼られている。部員たちが得たものは大きいが、与えてきたものも大きいのだろう。

門林先生自身、修学旅行で沖縄を訪れたことがきっかけとなり、大学では沖縄研究者に師事した。「歴史、自然、文化。沖縄は教材として豊かですし、子どもたちへの関心が高くて、協力してくれる大人が多い、恵まれた環境にあります」。ガイド活動を始めた時には、県外生との交流によって沖縄の良さに気づき、自信をもってほしいという願いもあった。「部活をやっている一番の目的は、閉じられた世界で自分の役割を決めてしまうのではなく、ゆさぶられて新しい自分に出会ってほしいということ。外に出て行動する〝外向き文化系〟だからアクト部なんです。今では先輩が後輩を指導する体制もでき、僕がいなくても前に進める部になりました」。

生徒は、沖縄と自分たちの未来をどう考えるようになったのだろうか。大蔵さんは「自分たちの問題に目を背けず、行動し、変化を起こすべき」、一方、仲村さんは「沖縄が抱える問題は複雑で、内地と違う歴史や文化が魅力。今の沖縄であり続けてほしい」と対照的だ。しかし、今春、県外の大学に進学する二人に共通するのは「一度外に出て客観的に沖縄を見つめたい。帰ってきて、自分たちが沖縄にできることを考えたい」という思いだ。

首里城正殿内をガイドする生徒。先輩と組んで実地で学ぶ。交流先から礼状が届くこともしばしば。

校舎から見た、火災直後の首里城。現地に行くと、炭のかけらが落ちていた。



火災後、マスコミの取材を機に、生徒たちは自分たちにとってのガイド活動を振り返った。

県外からの高校生に対し、学校内でスライドによるガイドも試行した。

VRによるガイドは、自前のスマートフォンをレンズにセットして覗くことで、ありし日の姿を見ることができる。